

追悼，湯澤 博さん

成相恭二（国立天文台名誉教授）

湯澤 博さんが2011年8月に亡くなられた。95歳だった。

天文月報の読者で年輩の方なら湯澤さんを、昭和25年に鬼怒書房から出版された「パロマーの巨人望遠鏡」の翻訳者の一人として記憶されているかもしれない。翻訳は岳父、關 正雄との共同作業で行われた。

湯澤さんは東京帝国大学天文学科を昭和15年に卒業されている。卒業研究は低温度星のTiO分子スペクトルの強弱を比較することで温度を決定する、というもので、藤田良雄先生との連名の論文としてTokyo Astronomical Bulletin, Numbers 447-448として出版された。星の色だけに頼らずに温度決定を行うのは、時代の先端をいくものだったと考えられる。観測は麻布狸穴にあった天文学教室のクックの8インチ（20センチ）望遠鏡に付けたシュタインハイルの45°対物プリズムを使って行われ、この装置は当時日本で唯一の星のスペクトルを取ることができるものだった。

卒業後は陸軍での教育に従事、終戦後は書店の経営、父君の参議院選挙の参謀業務、雑誌の編集責任者、雑誌社の顧問などをされて、天文学に復帰されることはなかった。出版社にいらっしゃった頃の著書に「科学と現実の間」（文化総合出版昭和62年刊）という随想や対談を載せたものがある。

私は2002年に岩波文庫から「パロマーの巨人望遠鏡」を復刻出版するに当たって訳者の一人として加わった縁で、ご遺品の一部の整理をお手伝いすることになり、その時に天文学徒としての唯一の証しである卒業の半年後に発表された4ページの論文の別刷と、3年後輩たちの繰り上げ卒業の送別会での天文学教室の教授、助教授、助手、後輩学生による寄せ書きを最後まで保管してい



図1 湯澤 博氏 87歳。2004年撮影。



図2 岩波文庫による復刻出版を祝うパーティで。2002年。

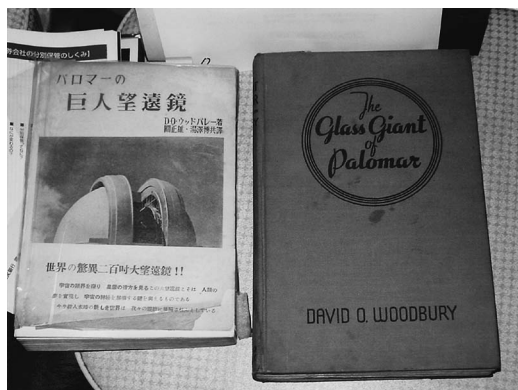


図3 訳書の初版本と翻訳に使われた原本。撮影は2004年頃。



図4 墓石、天地玄黄の文字と球形の墓石。湯澤さんご自身による設計。2012年2月 建立。

らっしゃったのを見いだして、湯澤さんの天文学に対する思い入れを感じた。

平和な時代であれば天文学の学究として過ごしたかもしれないのに、戦争の波に押し流されてほかの道を進まれたのだった。戦後鬼怒書房を始められた湯澤さんがGHQからの翻訳権入札に応じ

たのは、この本を世に出すことで学生時代にかかわったことのある天文学に何らかの貢献をしたいと思われたのだろう。

パロマー初版本の訳者序にある「…二百インチ望遠鏡が、…、いかにして建設されたかを知ることがは、将来我が国の科学発展のために真に有意義であると思う…」という文章は、自分が進みたかったが進めなかった天文学者への道を、後から歩いてくれる人たちへのメッセージと取れる。そして、出版の30年後になって動き出したすばる望遠鏡建設プロジェクトは、その本を読んだのがきっかけになって天文学科に入った小平桂一や私を中心になったのだった。建設が終わった後私たちは退職したが、すばる望遠鏡は完成した後、数々の成果を出している。これは私たちを引き継いだ若い人たちの努力の賜物である。

湯澤さんもあの「天地玄黄」の墓石の下でお喜びのことと思っている。